

書評編集委員会

1988.4.3
季刊 第83号

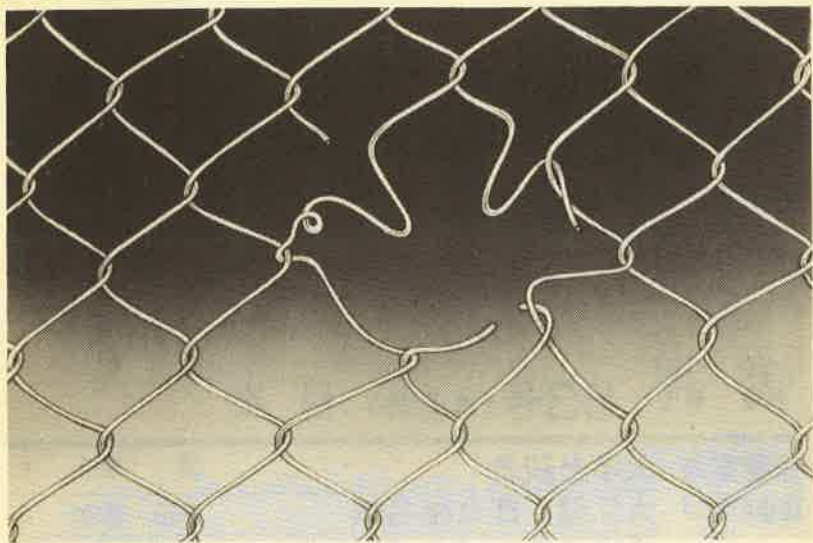
書評



書評**83号(4月号) 目次**

読書案内 読書の誘い <small>いざな</small>	大学と読書	堀 堅士	5
	大江健三郎と椎名誠	平田 重和	8
	経済学を学ばねばならぬ 学生諸君に薦める一冊の本	橋本 昭一	11
	誰を読むか	三谷 真	13
	機械は心をもつことができるか	池田 進	16
	新入生の方々への読書の誘い	引原 隆士	18
投稿	内藤湖南と頭山満 —間島協約に果たした役割—	西 重信	21
連載	日本中国 ことばの来往 その28	芝田 稔	32
	研究余滴 ヴェルレーヌ⑨ 『叡智』の世界	山村 嘉己	38
	羅 針 盤		2
	お知らせ / お詫びと訂正		53
	新歓セミナーのご案内		55
	編集後記		56

'88.4 羅針盤



「一九七二年一月からのことですから、ほんとうに長い年月がたちました。勝利を念じて働きましたが、いま私は、戦いに傷ついて小高い丘の上に寝かされたまま、まだ凄惨な戦いがつづいている下の方を眺めているように感じています。すでにこの通信を中断することに決意したせいも、今度の通信をここまで書きつづけるのにも、息切れがするような気がいたしました。戦いはつづいているのに、いや今から新しくはじまろうとするのに、……」（「韓国からの通信」―お別れのことば―より）

雑誌「世界」に約十七年にわたり連載されてきた「韓国からの通信」が、筆者T・K氏自身の手で、その幕を閉じた。朴正熙独裁政権の戒厳令下から初めて発信されたこの「通信」は現在まで欠けることなく、我々に韓国民主化運動勢力の生き様を伝え続けてくれた。

いまなお基地国家体制の続く韓国から、これほど長期に渡り、正確かつぼう大な「通信」を発信し続けることが、多大な困難と犠牲を強いてきたであろうことは想像に難くない。しかし、その困難にうち克つてきたこの「通信」に、どれほど多くの人々が心を動かされ、

時にはげまされ、そして勇気づけられてきただろうか。おそらくそこには性急な政治スローガンの絶叫は一

片だになかったであろう。いかなる情勢の激動に直面しようとも、挫折にあおうとも、T・K氏は民主化に生きる人たちを静かに語り続けてきた。「維新」も「光州」も「六月」も、われわれの前には「通信」とともに、そこに生きる人たちの姿がうたとたまってあらわれたのである。

韓国民衆のうたをどう形容したらいいのだろうか。抵抗歌？ たしかにそれは抵抗のうたではあるう。だがそれはイデオロギー過剰の定型化された情念のうたではない。だれもが子供の頃に経験したことがあるように、自分の中にある優しさが平然と土足で踏みこじられたとき、涙を目一杯に溜めた目で相手をじつと見つめる。その目のような抵抗のうただ。人を恨む心より人を信じる心が強いから、悲しみはどこかで楽天的な旋律につながっている。T・K氏は、その深い優しさと悲しみの澄明なうたごえを綴っていく。たしかにそれは恋のうたではない。だが、民衆の日々の営みが紡ぎだしたシャンソンのように聞こえる。われわれもその一人である。民衆は、いつたい何を愛しながら暮らしているのか、「韓国からの通信」はそのことを教えてくれる。

「韓国からの通信」が終わるからといって、韓国情勢が、とりわけでも日韓間の問題が解決したわけではない。盧泰愚当選以降、むしろ逆に日韓両権力層の政治的・軍事的・外交的癒着が強化され、「日韓新時代」としてキャンペーンされている。「大韓機事件」を利用した反「北」宣伝が強化される一方で、日本と韓国、朝鮮との歪んだ関係を指摘する声はますます弱められようとしている。このような日本の政治・文化状況の貧困を直視すれば「韓国からの通信」の持つ大切な意味をわれわれは決して忘れてはならない。

われわれ「書評」も朝鮮問題に対しては、古くから注目し、微力ながら日本と朝鮮との関係についての問題提起を行ってきた。今後も一層の努力を傾注することはいままでもないが、心ある多くの人々が、犠牲と苦悩に心を痛めながらも激励の中で生きる隣国の人々の勇気と良心を、今一度見つめ直さねばならないのではないか。

読書案内

今、何を読むか？
どう読むか？

新入生へ
読書への
誘い

読書というのは、楽しくかつ辛い作業だと思えます。読書が心に及ぼす波紋は、時に感激であり怒りであり悲しみであり絶望であったり、それは様々でしょう。しかし、いずれにしても私たちに

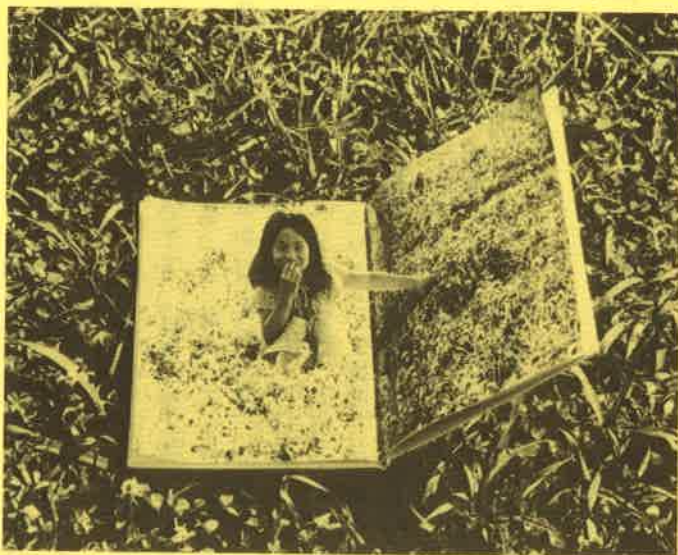
とつて読書が意味ある苦業であるのは、読書が私たちに「変身」を強いるからです。換言すれば「変身」なしに読書は意味を持たないのです。

更によく言うと、読書後の自分自身が、即ち読書の意味を語るのです。極めて柔軟な可塑性の感性を持ち得るこの時期に、読書は果たして重い意味を持つでしょう。単に博識になるためとか、技術修得のためだけではないのです。社会と無関係でない私たちが、読書においても「陳腐な物言いだが問題意識を持たねばならない

そこに生まれる自己の内実の葛藤、混乱、痛苦と格闘してこそ、読書は私たちとつながりを持つでしょう。読書の目的云々よりも、まず自ら読書と取り組み苦闘する、そして自己を変えていく過程を通ることから始めませんか。

ここに「読書案内」として各先生に、読書について語っていただきました。参考になるところは、どんどん吸収してください。読書が、新入生の皆さんに「コペルニクスの転回」の起爆剤となることを願ってやみません。





大学と読書

堀 堅 士 (法学部教員)

(一) ここは「学校」ではありません。

「防大」と人は言います。しかし、あれは「学校」であって「大学」ではない。総理府外局にはこの「防衛大学校」の他に「警察大学校」があり、大蔵省外局には「税務大学校」、自治省外局には「消防大学校」があります。

そして、これらの「大学校」というのは国家公務員に必要な「技術」を修得させるための教育機関なのです。消防大学校では「火消しの技術」を、税務大学校では「取り立て技術」を、警察大学校では「捕える技術」を、防衛大学校では「戦闘の技術」を修得させます。

(二) 大学では「勉強」しなくてよろしい。

「勉強」させるとは、何らかの「技術」を修得させるために、他人がそれを「強要」することを意味しています。

その故に、小学校・中学校・高等学校では、それは「授業」と呼ばれているのです。「授業」の「業」とは「苦業」の「業」なのであって、嫌がっている生徒を先生が強制的に勉強させるからそれは「授業」なのです。

しかし、大学ではそれは「講義」と呼ばれています。この「講義」の「義」とは「真理」ということなのであって、教授が永年にわたって「研究」した独自の学説を、「これこそ真理なのだ」と誰はばかることなく発表するのが大学における「講義」というものなのです。そして、その「講義」を聞いて、学生もまた自由に「研究」をするのです。「果してこの教授の学説は真理なのであるうか」と。

(三) 古い話ですが、旧制大学の大学院ではその「講義」すらなかったのです。

そこには「時間割」も、「学期」も、「試験」も、「年

限」もなく、勿論「卒業」もありませんでした。昭和二十四年春四月、わたくしは京都大学の大学院に入りました。わたくしの指導教授は憲法学者の佐々木惣一先生でしたが、先生はわたくしにこう言いました、「あなたは京大の大学院へ入ったのであって、京大法学部大学院へ入ったのではない」「あなたが日本の或いは諸外国の憲法学者の著書だけを読んでいたのでは、あなたは一流の学者にはなれない。基本は憲法学の研究にあるとしても、あなたは文学部や経済学部は勿論のこと、工学部へも理学部へも、農学部へも積極的に出て行って、自由にあらゆる教授の講義を聞きなさい。そして、その講義に興味があれば、何時でもわたくしはその教授への紹介状を書いてあげる。」

昭和二十四年といえは敗戦後の混乱期であり、わたくしの家は不在地主であったため祖先伝来の田畑を二束三文で取り上げられてしまった直後でしたから、わたくしは生活費と洋書購入の費用を特別研究生としての奨学金とアルバイトでまかないながら乗り越えて来ました。

しかし、わたくしは讀書が何よりも好きでしたから、それから昭和二十八年に關大へ就職するまでのあの自由な研究期間こそが、わたくしの人生にとって最も幸

福な期間であつたと思つています。誰の「物まね」でもないわたくしの独自の學說の基礎をつくり上げたのも、この期間でした。

(四) しかし、現実に、今日、ここにあるのは……。

関大法學部へ入つたばかりの新入生の大部分は、早速、次の目標を「司法試験」か「行政試験」の合格に置いています。そして事實、それらの「國家試験」に合格するとしなないとでは、その將來に大きな「差」が起るのです。

階級制度が明瞭でわかり易いので警察官僚を例に取つて言えば、「國家公務員試験」に合格しないで警察に入つた者（地方組）は、「巡查」から始まつて「巡查部長」「警部補」「警部」「警視」とそれぞれの段階での合計四回の内部試験に合格しながら、この「警視」にたどり着くまでに約二十五年かかります。（勿論、その途中の何処かで「不合格」となつて足踏みしたり、昇進をあきらめてしまう者のほうが多いのです。）

それに対して、「國家公務員試験（二種）」に合格した者（キャリアー組）は、「警部補」から始まつて途中の内部試験もなく三年五カ月で同じ「警視」になります。

また、「國家公務員試験（二種）」に合格した者（準キャリアー組）でも、「巡查部長」から始まつて途中の内部試験はなく十三年六カ月で「警視」になります。

他の官庁での昇進も、これに似たり寄つたりですから、行政官僚になりたい者は「國家公務員試験」の合格を、司法官僚（および弁護士）になりたい者は「司法試験」の合格を夢見るわけですが、その「目標」を達成するには——今日では——「受験産業」と呼ばれているそれらの試験のための「予備校」へ通つて、傾向と対策への受験「技術」を修得しなければ合格はおぼつかないといふのが（残念ながら）「現実」なのです。——今日では「灘高」級か「予備校」出でなければ一流大學へは合格出来ないという「現実」をあなたがたは身をもつて経験して来たはずです。△悪い奴ほどよく眠る。この未法の世√では、正直者は馬鹿者であり、面従腹背こそが出世の早道なのです。

そこで、あなたがたの讀書への道が二つに分れます。その一つは再び「受験のための讀書」という道、他の一つは自由な「眞理探究のための讀書」という道です。そして、△二兎を追う者は、一兎をも獲ず√なのです。

（一九八八・二・十四）

大江健三郎と椎名誠

平田重和（文学部教員）

一九八六年十一月に、関大創立百周年記念行事の一つとして、学生部が主催した講演会が幾つかもたれた。

その一つに「人間の権利とヒロシマ」と言う演題で、作家の大江健三郎氏が講演したのがあった。時間が午後の十三時から十四時三十分までという時間帯だったので、ちょうどその日私の受け持っていた三時間目の専門科目の授業時間と重なっていたが、学生諸君に「今、大江健三郎が本学に来て、これから講演するので、今日はそれを聞きに行こう」と言つて、出席をとり学生諸君と一緒に第二学舎二号館C304教室へ行つた。

作家大江健三郎は、周知のように、大学仏文科の学生時代から小説を書き始め、一九五八年に刊行した短編集『死者の奢り』の中の『飼育』によって第三十九回芥川賞を受賞し、その後も多数の作品を世に問い、

政治的にも核戦争に反対する立場を表明するなど、文学者として時代の証言者たらんと活躍している硬派の作家である。

講演の内容は、文字通り「人間の権利」即ち「人権」という問題を中心に据えたものだったが、話は子供の時の体験や脳障害をもった御子息のことにも触れた具体的な事柄から説き起こされた説得力のあるものだった。講演というものの性格上笑いを巻き起こすような場面も多々あったが、脳障害児として生れた長男の話の時にはここで笑つて良いものかどうか、ためらわれるような気もした。

さて、この長男が生れた時には、大江氏は既に作家としての道を歩み始めていたのだが、父親として、作家として深刻な挫折感に見舞われる。ところが、こうして落ち込んでいた時に、たまたま広島行を誘われ、ヒロシマを体験したことで立ち直ることができた。絶望感に襲われた時には、自己の内部に空洞ができたやうな思いだったが、この空洞に徐々に（生きると言う方向へむけての）「核」が形成され、再び作家活動ができるようになった、と言うような事だつたと思う。

人権という問題は、抽象的なレベルで考えるべき性格のものではなく、こうした深刻な体験に基づいた

上に形成された個人的な「核」を基礎として考えられるべきものである。このような「核」が個々人に形成されていなければ、そうした空洞を巧みに為政者から突かれ、戦時中のような天皇制がまかりとがり、何時又ファシズムにならないとも限らない。「核」が内面に形成されて始めてヒロシマとも関わる事ができるようになる、というのが大江氏の講演の主旨だったように思う。

大学での講演という性格上、啓蒙的なニュアンスも多分にあつたと思うが、最後に最近の若い作家達（特に誰とは名前はあげられなかったが）は、風俗などを描くのに巧みだが、果たして彼らが、内面的な「核」を持っているかどうか疑問だと、現代作家批判をしていたのが印象的だった。芥川賞の審査委員を下りたのも、このへんのことがあつたように推測される次第である。大江氏の批判の対象に入っていたかどうか判らないが、椎名誠は大江健三郎とはかなり異質なベストセラー作家である。若い人たちの間で特に人気があるので、多くの諸君は知っているだろう。この二人を取り上げるのは、いささか唐突なように思えるかもしれないが、吉本隆明が大江健三郎の「レイテンツリ雨の木」を聞く女たち」について触れる時に、椎名誠の「哀愁の町に霧が降る

のだ」の一節を引用している（「解体論」「海燕」八十二年九月号）ということもあるので許されるだろうか。

椎名誠のブンガクは、「昭和軽薄体」とか、「話体」とか、いろいろ言われている。小説と銘うたれている作品も幾つかあつて、庄野潤三を思わせるような作風で日常の身近な事柄をテーマとしている（視界半径5キロなどといわれたりもしている）。そこはかとした人生の哀しみと、ヨロコビと愛が感じられるので、これはこれで読ませる。しかし、なんと言つても、椎名誠の真髓はスーパーエッセイと言つて評語で分類されるジャンルの紀行文、実話的体験談などではないだろうか。紙数の都合で一つ一つ引用している余裕がないが、読んでいて思わず吹き出してしまふような面白おかしい箇所がちりばめられてある。なるほど「昭和軽薄体」と言われるような要素が無いわけではない。が、その場限りの通り一べん的な可笑しさだけでもない。日常生活や旅に出た時に役立ちそうな情報もあり、警官や役人と言つた制服人種（権威）にたいする反感、軟弱な若者や幼児化した女子大生、人前でいちゃつくことを恥としない新婚カップルなどに対する露骨な厭味を表したり、骨つばい所を見せたりする。野性志向というか自然が好きで、列島改造論にのつとつたような護

岸工事で自然が破壊されたり、川が汚されたりするのに対して怒りを爆発させたりして、思わず共感するところがある。

お堅いということに通っている岩波書店が、ついに椎名誠をとりあげるに到った。同書店の情報誌『図書』に「活字ヨロコビ団・月間報告書」と言うタイトルで、一九八六年一月号から一九八七年四月号にかけて椎名誠の連載ものが掲載された。(昨年十月に「活字のサーカス」と言うタイトルで、加筆されたものが岩波新書として出版されたことは周知のところであろう)

「面白本大追跡」と言う副題が示しているように、読書案内のような内容のものだが、日頃私などはあまり注目したことがないような本が紹介されていて参考になったし、身近な事柄を取り上げてあって、それぞれ面白く読んだ。

一昨年十一月の記事は「おせっかいニッポン」というタイトルで、日本人というのはおせっかい過剰の人間ではないかというようなことを述べたものであった。例えば、駅のホームでのアナウンスから始まって子供に対する「教育」の押しつけなど……そして千葉の海岸へ行った時の話で締め括っている。少し長くなるが最後のところを引用してみよう。

「昨日、千葉の幕張海岸に写真を撮りにいった。ここは以前潮干狩りの名所だったが、大規模な工業地帯化によって埋め立てられ、人口海岸として蘇生したところだ。むかしこの幕張に住んでいたことがあるので、自然の海が人口の海にかわるとどのくらいおぞましいものになるのかよくわかった。

管理管理、規則禁止警告看板の見本市のようになっていた。立入禁止からはじまって、きけん、警告、のぼるな、入るな、とるな、さわるな——といろんなところに立っている。「利用者のじゅん守事項」というたいそうむずかしい語句の看板にはぎっしりとこまかい規則が書かれていた。しかし笑ってしまったのは「つぎの人は泳いではいけません」という項目だった。

「心臓病、腎臓病、血圧の高い人、肋膜炎、中耳炎、肺炎、肺尖カタル、リウマチ、てんかん、筋肉のけいれんする人、脳充血を起こしやすい人……」

まるで予防注射を受ける前の注意事項のようだ。いちいちこんなふうにご注意されなくても、肺炎カタルの人は気分が悪くておそらく泳ぐまい、と思うのだ。筋肉のけいれんする人もつらくて泳ぐまいよ、と思うのである。

やっぱり世の中で一番ヒマでおせっかいなのは、役

人なのだなあ。」

なにげなく見過ごしてしまいそうな立看にスルドイ視線を向け、その滑稽なところ、異常なところに敏感に反応するあたり、物を見る確かな目を持っているように思う。

作家と名のつく人で、観察力のない人などはおそろくないだろう。大江と椎名、かなり異質な二人だが、かたや自己の「核」を拠り所として、かたや身近に起こるできごととに敏感なアンテナをたてることで、しっかりものを見ていると言えるだろう。

大学での四年間、おおいに勉強し、またおおいに遊んで、ものを見る確かな目を養ってもらいたいと思う。

経済学を学ばねばならぬ
学生諸君へ薦める一冊の本

橋本昭一（経済学部教員）

*フリートリヒ・エンゲルス

『イギリスにおける労働者階級の状態』

（武田 隆夫 訳 新潮社）

この書物は最初一八四五年に出版された。エンゲルスの名はマルクスの名とともによく知られている。諸君の一年先輩の「基礎経済学」（一年次必修科目 五人クラス制）の授業中に、昨年の四月早々「知っている経済学者」の名を書かしたところ、回答者四一人中三三名、すなわち八〇%以上の者がマルクスの名を挙げた。

学生がその時知っていた他の経済学史上の人物といえ、スミス（二〇名）、ケインズ（一三名）で、これ

がご三家であるが、それにつづいて第四位がエンゲルスであった。このアンケート（試験問題）は「知ってゐる五名の名を挙げよ」となっていたが、一名の名も挙げる事ができなかった学生が八名いた。第三位のケインズで一三名であるから、多くの学生はマルクス以外の名を捻り出すのにかなり苦勞した氣配がある。参考のために紹介するとエンゲルスにつづく第五位以下の人物は、リカードウ（八名）、リスト（五名）、ケネー（四名）、マルサス（二名）とつづき、ロック、モンテスキュー、ルソー、ハイデガー、サルトル、さらには中内功、松下幸之助、水野忠邦とさまざまな人物がつづく。

さて諸君の先輩があげた経済学史上の人物の著作で、どれか一冊を薦めるとなると、私は上記の書物しか思ひ浮かばない。

私が学生であつた昭和三〇年代後半までは、マルクスの著作はまだまだよく読まれていたが、いまどきの若者にとつてマルクスが魅力的な人物とは思わない。ところでエンゲルスは、いわばマルクスの著述生活のスポンサーであり、同時に遺稿編纂者である。しかしそれだけではない。少なくともこの著『イギリスにおける労働階級の状態』は、哲学者マルクスを経済学研

究に向かわせる契機となつたのである。

エンゲルスは一八四二年からの約二年をイン格蘭ドのマンチェスターで過ごした。ときにイギリスは産業革命を経て、世界一の工業国家になつていた。エンゲルスが見たイギリスは、経済的には全盛期にあつた。しかしイギリスの富を汗と血と涙をもつて、実際に造りだした労働者たちの生活は決して快適なものではなかつた。とりわけ膨大な滞貨という資本主義独特の現象の中で職を失つた人々やその家族の生活は悲惨を極めた。エンゲルスは、各都市や各産業分野の報告資料や議會での討論や裁判所の判決に関する新聞報道を丹念に拾い出しつつ、プロレタリアートの窮乏化が資本主義的メカニズムの必然的・法則的結果であることを示した。

エンゲルスの著書は、輝かしい生産力を誇る近代産業が、労働者の生活を「近代化」するものではないことを具体的に、説得的に示している。

しかしながら資本主義は一九世紀後半以降、その姿を変えてゆき、国家が貧者と労働者の保護のために、富者・強者の自由を制限してゆくようになる。いま巷ちまたで問題となつてゐる所得に関する累進課税制度も、いまから一〇〇年前のイギリスで労働者保護のために本

格的に実施され始めたものなのである。そのような価値と政策の轉換にさいしてマルクスの著書『資本論』（第一巻は一八六七年に發行され、第二、第三巻はエンゲルスがマルクスの死後編集發行した）の存在が果たした役割を無視することはできない。やがて諸君が学ぶことになるワルラス、マーシャル、ケインズ、シュンペーター等の優れた経済学者の理論は、マルクスの著作の存在が前提となつてゐる。したがつて、マルクスを否定し、批判し、超克するというイデオロギーこそ現代経済思想の生みの親であるといつても決して過言ではない。そしてこのマルクスの経済思想に大きな影響を与えたという点では、エンゲルスのこの著作もまた偉大な作品と呼ばれるべきである。

資本主義の影の部分に焦点を当ててゐるために、この著書を読む限り、資本主義の富はひたすら労働者によつてのみ造りだされ、企業を興した人々や金融を営む人々の創意工夫や犠牲や努力はまったく関係がなかつたような印象をもつ。企業家が存在しない方が、労働者はより幸せであつたと、エンゲルスは真剣に考えていたようである。この側面で冷静な判断力があつたなら、貧困を資本主義の唯一無二の本質と考へる帰結に迷ひこむことはなかつたであらう。

もつともそのようなバランス感覚が働いていたら、マルキシズムは一時的といへど、かくも多くの人々に影響をあたえることがなかつたであらうというのも事実である。人々は時代を問わず単純と明快を好むからである。

私はこの書を二〇年ぶりに読み返してみても、今書いたような印象をもつた。それにもかかわらず、いやいや経済学を学ぼうとする新入生諸君には是非読んでもらいたいと思う。この翻訳書は版を重ねているので、古本屋へいけば三〇〇円位で入手できる。そして諸君の読後感想を聞かせて欲しいと思う。

誰を讀むか

三 み 谷 たに 真 まこと
(商学部教員)

大学でのこれからの数年間は、読書に明け暮れることのできる最初で最後の貴重な時間である。所属学部

の専門分野にとらわれることなく、興味の赴くままにいろいろなものをどんどん読んでもらいたいものだ。とはいふものの、限られた時間であるから効率よく使う必要がある。書物の氾濫する現代であるからなおさらそうである。何を読むか、誰を読むか、その選択が大きな問題なのである。

そのために、呉智英（くれともふさ）の『読書家の新技術』（情報センター出版局）を読んでみる。この本は「知的武装」のための読書論であり、著者の言葉で借りていえば「ほどほどの学力とわずかの努力と貧しい経済学で、現実に行ける読書の方法を具体的に記して」いる。第二部が技術編ですぐにでも実行可能である。第三部はガイド編で名著・古典の紹介で非常に役に立つ。そして、圧巻なのがその第一部の知の編である。ここでは、この本で紹介されている方法を駆使した著者の知的武装ぶりが如何なく発揮されている。「読書論を読む」の章では、文学部のＴ先生もばつさりと斬られている。その一節を紹介しておこう。「Ｔ（本文中ではもちろん実名）は、進歩的文化人の常識の奴隷になるなど主張しているくせに、うんざりするほど「常識の奴隷」になっている。第一には大衆社会の奴隷に。第二には、もっと広く、彼が嫌悪しているように見え

る近代思想の常識の奴隷に」（六十二ページ）。単なる読書論ではないすこぶる刺激的な書物である。

この「知の編」の統編とでもいうものに、「インテリ大戦争―知的俗物どもへの宣戦布告―」（JICC出版局）と最近刊の「バカにつける薬」（双葉社）がある。どちらも折り紙つきのおもしろさである。「インテリ大戦争」の表紙には「竹村健一、渡部昇一を筆頭に、世にのさばる似非知識人たちをここまで徹底的に粉砕した書物がかつてあっただろうか？（いや、ない）。これは地球最後の思想家、呉智英が叩きつける思想の挑戦状だ！」とある。彼の思想の原理は「封建主義 その論理と情熱」（情報センター出版局）に詳しいが、その基礎は「近代という時代の根底的な批判」（「バカにつける薬」七ページ）である。例えば、愛について彼はこう語る。「今、我々は、「愛」の氾濫の中にいる。「愛」は、しばしば福音であるかのように語られ、本源的なものであるかのように語られ、人間性を整合するかのよう語られる。その内実について、何一つ検証されることがないまま。だが、ここで見てきたように、それは亀裂を内部に秘めた（近代の―引用者）護教的神話体系にすぎない」（同上、第四章「愛の悲しみ」と。あるいは、そうした近代批判の延長線上で歌手の中島

みゆきを絶賛する。その論理は首尾一貫しており、批判はあくまでも厳しく激しい。彼の思想に共感するかどうかは別にして、ぜひ読んでもらいたい人物である。なお、『現代マンガの全体像』（情報センター出版局）というのものもある。マンガ好きの人ほとくに、またそうでない人もぜひご一読を。

思想を読むのに疲れた人は推理小説やスパイ小説などが息抜きになる。ただし、そればかりというのでは少し情けない。もちろん、それが研究の題材であるというのなら話はべつであるが、『CIA』や『KGB』（ともに新潮選書）というノンフィクションものも書いているB・フリーマントル（新潮文庫）や正統派のジョン・ル・カレ（ハヤカワ文庫）などのスパイ小説は、スパイ問題が話題となつている昨今だけに興味深く読めるだろう。しかし、この問題については「事實は小説より奇なり」という感じがする。ロバート・B・パーカーの「スペンサー・シリーズ」（ハヤカワ文庫）もおもしろい。これは探偵ものであるが、いわゆるハードボイルドと呼ばれているものである。このシリーズには料理の話がよくでてくるのであるが、それを集めた『スペンサーの料理』（早川書房）という本もでている。あと特にお薦めは、ディック・フランシスという作家

のシリーズである（ハヤカワ文庫）。イギリスの競馬場を舞台にしたもので、主人公がみんな実に魅力的なのである。この作品群は読み出すと止められない。全作品を一気に読みたくなってしまう。ファンの間ではディック・フランシス症候群と言われている。その点で要注意である。こうした小説類は自分のお気に入りの作家を見つけて出すことができれば、より楽しくなるだろう。最後に種々の雑誌を読んでみよう。『ポパイ』、『アンアン』、『DIME』なんでもいい。ただし、趣味のためにだけ読むのではなく、それらを通して自分の生きている今という時代を読み取ることが念頭において、それができるようになるには少々時間がかかるであろうが。

本との出会いは素晴らしい。その出会いを大切にしたいと思う。

機械は心をもつことができるか

池田進いけだ まゐ
(社会学部教員)

私はこの学年末の心理学の試験に「機械は心をもつことができるか」という問題を出した。心理学はもちろん「心」を研究する学問であるが、私の一年間の講義の目論見は、いったん「心」という常識を忘れ去つて、人間の仕組みとはたらきの中から「心」という何かを組み立てなおしてみようというものであった。だからこの出題は学生諸君の一年間の研鑽の成果を裏側からのぞいてみようというねらいであった。

ほぼ完璧な論理展開をしてくれた学生が数名いたのはうれしいことであつたが、案外だつたのは、ある書物の題名を連想した者が五百人ほどの受験者のなかに一人もいなかったことである。その書物はV・ブライテンベルクの「模型は心を持ちうるか」(哲学書房、一九八七)である。出題はこの本の標題をすこしかえて

みただけのものだから、もしこれを読んでいたり、あるいは書店でみたりしたことのある者にはすぐにびんとくるはずのものである。それだから、この書物を読んだ、あるいはそれを知っていると見えると思える論述をした人がいないか楽しみに答案をくつていたのだが、ついに最後までそれに出あうことはできなかった。

この題名に似た標題の書物はいくつもある。古くはN・ウィーナーの「人間機械論」(みすず書房 一九五四)、J・Z・ヤング「人間はどこまで機械か」(白楊社 一九五六)があつたし、最近ではたとえば「ヒトになりたいコンピュータ」(対談集、電通 一九八五)や「心をもつ機械」(J・パースタイン、岩波書店、一九八七)というのものもある。せめてこのような書物があるということだけでもほのめかしてくるような答案がいくつかはあつてもよかつたはずのものではなからうか。

「心理学」がもうそうなつてしまつて、最近では、人間の「心」に接近するのに伝統的な学問領域からだけではどうしようもなくなつてきている。ウィーナー以来のサイバネティックスの流れは人間の精神行動をどこまで自動機械によつて類比させることができるかというところから始まつたし、逆の文脈で機械をどこまで人間に近づけることができるかという

意味で、バイオセンサー、バイオコンピュータ、ニューロコンピュータなどの研究はきわめてラディカルな「心の研究」そのものを含んでいるといつてよい。

一方で技術の進歩が神経学の知識を急速に増大させている。ことに中枢神経系に関する知識は、人間の心がいわば体の仕組みによってどこまでアプローチできるのかという視野を開いた。神経行動学、神経心理学という用語ははやくから使われているし、この視野がニューロコンピュータなどのいわゆる人工知能の研究にとつて欠かすことができぬことはいうまでもない。

またマクロな視野から、比較動物学や比較生態学の研究は、動物が精神行動の面でもどこまで人間に近づけるのか、あるいは、動物と人間の精神面での連続性を明らかにしてきたことよつて、人間の「心」のメカニズムについての洞察に大きく寄与している。たとえばE・リンデンの「チンパンジーは語る」(紀伊国屋書店 一九七八)は「言語」が人間だけの持物ではないことを説得的に示唆する興味深い書物である。

このように人間の「心」にはあらゆる領域から、あるいは思いがけぬ領域から探索の手がのびてきている。だから私たちには自分の持ち場だけでなくて、いろいろな領域の出来ごとについての興味と感覚が求められ

てくる。もちろん私に工学関係の論文を理解せよといわれてもできることではないし、生態学についてその方法論がわかっているのかといわれてそうといえるはずのものでもない。けれどそのこととかがわりなしに、他の領域の出来ごとが私のテーマに関連するかどうか、それがどのように私の考えをインスパイアしてくれるのかどうかを見とおすのはむしろセンスという空想力の問題ではなからうか。そしてそのセンスは広く知ることによつてしか鋭くさせることはできない。機械は心を持つことが出来るかという問いがショートサーキットやブレードランナーを連想させるのはあたりまえとしても、それが絵ぞらごとであるという理由だけで否ときめつけてしまうのでは何と没論理的であり空想力が乏しいことではないか。

ある会合の席で知り合った機械工学者と話をしている間に、彼が私の専門が知覚論であることを知らずにこのようなことをいつていた。「近ごろ機械屋の間で話題になつていふことのなかに、人間は物の材質をいつたいどのようにして一目で見分けるのかということがあるんですよ。」このことはまさに私たち知覚屋の求める基本問題に直結するテーマそのものである。これでわかるように、今の研究はあらゆる学問領域が脱領域

化してそれぞれ科学の重要問題に直結してきている。

「機械に心は持ってほしくない！」これは試験の問題に解答しているうちに頭がこんぐらかってしまつて最後にあげる悲痛な叫びかもしれないが、私としては気持はわかるけれどもそれだけでは単位はあげられないのである。

〔付〕読んでおもしろそうな本

D・R・グリフィン『動物に心があるか』

岩波書店 一九七九

D・モリス『美術の生物学』

法政大学出版社 一九七五

新人生の方々への読書の誘い

引原 隆士 (工学部教員)

新人生の皆さん、入学おめでとうございます。今、

皆さんは受験勉強から解放されて一息ついておられることでしょう。また、希望に満ちて入学され、学問・研究の世界に早く踏み出したいと夢を膨らませておられることでしょう。そのような皆さんに、今後の勉強の指針を与えてくれる書籍として次の二冊を紹介いたします。通学の電車の中で、マンガの替りに読んで下さい。

(1) 『認知科学の方法』 佐伯 胖 著

認知科学選書10 東京大学出版社 一八〇〇円

(2) 『システムづくりの人間学』

G・M・ワインバーグ著 木村 泉 訳

共立出版 二五〇〇円

(1)は、古来より洋の東西で様々な学問を通じて問われて来た、「人間の心とは何か」というテーマに関する研究書シリーズ(認知科学選書)の一冊である。本シリーズは、「認知」という概念をキーワードにして、従来の縦構造の狭い学問領域を越えて、心理学、言語学、哲学、人工知能などの研究者が集って執筆したクロスオーバーな研究書である。その中で、本書は特に異質な内容となっている。著者は、自らの研究における人間の

認知過程の認知、或いは発見の経緯を述べることにより、認知科学研究の一方方法を提示している。しかし、それは実用書的なHOW TO方式の内容ではなく、科学的研究一般に通じる姿勢を示している。この点で、研究書というよりある分野の優れた研究者の自伝に近い印象を受ける。

新入生に限らず、研究者、研究を志す者にとつて、第一章「おもしろい研究をするには」は必読の内容である。著者はここで研究のおもしろさは、①研究自体の構成のよさ、②すぐれた評価者との出会い、③背後にある時代精神と研究環境の三者の相互作用として生み出されるといふ観点より、その個々について実例と実感を持つて説明している。さらに、若い人々が研究・学問において成功し、自らの手で学問の進歩に貢献するために欠かせない考え方と闘う相手とを明確に示してくれる。従つて、読者には分野によらず、ここに述べられた研究の方法を意識的に自分の勉強方法として取り入れることをお勧めしたい。また、自らの研究姿勢を確立したと考へておられる方には、本書の指摘はその反省材料になると思われる。

本書の残りの章では、著者が示した研究方法の実践例が述べられている。読者は、これを自分の研究テ-

マに読み替えることができれば、今後の研究に非常に多くの指針を得ることができるであろう。

(2)の書籍は、コンピュータ雑誌の一つであるDIT誌に連載されている、同一著者による「イーグル村通信」を元に、新に書き下ろされた内容を含めて出版されたもので、御存知の方も多いであろう。日本の情報処理分野では、未だ計算機プログラマとシステム分析家が分離しているとは言い難い。本書は、米国におけるシステム分析家に関するエッセイである。

著者はシステム分析を行う必要がある読者に、自分の分析能力を仕事上の計算機システムや機械システムだけに適用するのではなく、自らの思考方法や専門家としての挙動について考えるというように、自分自身に適用する能力を身に付ける必要を説いている。すなわち分析者は、「自らの周囲状況はどんどん変化しているにもかかわらず、自分の分析能力を常に見つめ直して改善しなければ物事の見方が狭くなる。そして、直面している問題に比して自分の知識が少なくなっている。」ことに気が付かない。その結果、分析者には型にはまった問題の構造的な部分以外見えなくなる。本書はこの点を上げ、おもしろおかしく説明してくれている。

本書全体を通しての著者のこの主張は、日頃、ルーチン・ワークに追われる読者の目を洗ってくれる感がある。あらゆるシステム（人間の集団を含む）を管理する必要のある人、また、型にはまった勉強を続けて来た方々には、一読の価値があろう。しかし、本書はこのような理屈っぽく読まなくても、人間の心理についての数々のエッセイは単純に楽しめるものである。

投稿

内藤湖南と頭山満

間島協約に果たした役割

西 重 信

はじめに

一九〇九年（明治四二年）の「間島に関する日清協約」（間島協約）には、内藤湖南が決定的影響を与えている。⁽¹⁾一方湖南のほかにも、同じような考え方で間島問題の決着を日本政府に迫った数人の人物があった。「玄洋社」の頭山満を中心にした勢力である。彼らは、「間島問題に就き覚書」と題した提議を一九〇九年一月に外務大臣小村寿太郎に提出している。この年の二月には、湖南が「間島問題協定案私議」をやはり外務省に提出している。二つの提議が

ほとんど同時であること、また湖南は朝鮮で「黒龍会」や「一進会」と密接な連絡をとりながら間島問題の調査研究を行っていた⁽²⁾ことからみて、両者にはきわめて注目すべき関係があったのではないかと思われる。この小論では、湖南と頭山満の勢力が間島協約にどのような役割を果たしたのかについて述べてみたい。

注

(一) 「間島」とは、中華人民共和国吉林省延辺地方である。ここには中国でたゞ一つの朝鮮族自治州である延辺朝鮮族自治州がある。一九八二年の統計に

よれば、自治州人口は一八七万余で、そのうち朝鮮族は七五万余、約四〇％を占める。自治州の歴史と現況については、大村益夫訳『中国の朝鮮族』（一九八七年、むくげの会）および拙稿「延辺朝鮮族の歴史」（『ひょうご部落解放』第二九号、一九八七年二月）を参照されたい。また内藤湖南と間島協約については、拙稿「内藤湖南と間島協約」（本誌第七三号、一九八五年）および「内藤湖南と『北朝鮮ルート』論」（本誌第七七号、一九八六年）を参照されたい。

(二) 湖南の朝鮮での活動とこれらの団体との関係については、拙稿「内藤湖南の朝鮮観」（本誌第八〇号、一九八七年）で簡単に触れている。

一、「間島問題ニ就キ覚書」の連名者

「覚書」の連名者は、頭山満、五百木良三、小川平吉、大竹貫一、河野広中、国友重章、柴四郎、望月龍太郎の八名である。⁽¹⁾

これらの人物の経歴には、いくつかの共通点がある。一つは、日露戦争前に「国民同盟会」や「対露同志会」の中心となって対露主戦論を主導し、ポーツマス条約の調印に際しては講和反対を主張したことである。もう一つは、彼らはなんらかの形で朝鮮と直接のかかりをもっている点である。まず頭山満については多くを説明するまでもなく、平岡浩太郎、箱田六輔とともに「玄洋社三傑」と呼ばれた人物である。「黒龍会」主幹の内田良平の同郷の先輩であるだけでなく、「玄洋社」と「黒龍会」はいわば親子関係にあつて一般には一体のものとしてあつた。五百木は、日露戦争前に「日韓同志会」を組織したほか、後述の望月とともに朝鮮で金鉱の採掘や済州島での椎茸栽培を手掛けたこともある。一九二七年に田中内閣の鉄道大臣になる小川は、一九〇六年に「黒龍会」幹事に選任されたのち、朝鮮併合後には李王家の法律顧問を務めた。日露戦争直前に衆議院議長の職にあつた河野は、小川らと協力していわゆる内閣弾劾答文を可決させて第一九議会を解散し、国内世論を開戦へと主導している。小

川と河野は、一九〇九年の「朝鮮問題有志大会」でも協力しており、この時には河野が座長を務めた。国友は「閔妃事件」に加わった一人で、日露戦争後は白頭山（長白山）や間島の探検、調査を行い、一説には間島の領有問題を日本の当局者に進言したのは彼であつたともいわれている。間島協約締結の直前に没したが、遺言によつて白頭山頂に分骨埋葬された。連名者の中で「閔妃事件」に加わった人物には柴もいる。事件の裁判で無罪出獄後、衆議院議員に前後八回当選した彼は、のちに川島浪速の満蒙独立運動にかかわつたが、この時五百木や大竹らも一緒であつた。望月は日露戦争中に神鞭知常に同行して朝鮮に渡り、「一進会」の顧問に就任した。その後、外交上支障があるとして駐韓公使林権助に帰国させられたが、再び今度は咸鏡北道城津郡で石炭事業にのり出し、朝鮮での有数の炭坑の一つといわれるほど成功した。

このような連名者の経歴にもまして注意しておかなくてはならないのは、彼らが日本政府に対して、とくに朝鮮政策に関して直接影響をおよぼす立場にあつた点である。

もつともよい例が、一九〇七年の高宗（光武帝）退位事件での行動である。七月に起つたいわゆるハーグ密使事件において、柴と望月を除く六名の連名者は、高宗の讓位かもしくは朝鮮の日本への併合かの二者択一を迫る「覚書」を韓国統監伊藤博文に送つた。

第一案

韓国皇帝をして主権を我帝国に禪讓せしめ日韓両国を合併すること。

第二案

韓国皇帝をして其位を皇太子に譲らしめると同時に其統治権を我帝国に委任せしむること。

そのうえで彼らは、この二案のうちの第一案をとるよう強く要求している。

断然第一案を採るを上策とす。若し萬一他の事情の爲め第一案を取る能はずとするも、必ずや第二案を断行せざる可からず。

一九〇七年の時点ですでに併合を迫っていることもさることながら、もつと注目すべきはこの時の「覚書」が与えた影響力である。結局、高宗は事件の責任を問われる

形で退位させられたうえ、韓国政府は第三次日韓協約を押しつけられた。この結果、韓国内政に関する重要部門に多数の日本人官吏が登用され、日本による朝鮮の植民地化が事実上完成した。頭山をはじめとする連名者の力を余すところなく示すできごとであった。

注

- (1) 金品珪編『日本外務省陸海軍省文書(第一輯)・間島領有権関係抜粋文書』(一九七五年、大韓民国国会図書館) 二九九頁。以下、頁数だけを記す。連名者の経歴に関しては、特別の注釈を記さないものについては東亜同文会編『続・対支回顧録(下)』(一九七三年、原書房、復刻版)、黒龍会編『東亜先覚志士記伝(下)』(一九七四年、原書房、復刻版)、竹内好編『アジア主義』(一九六三年、筑摩書房)によった。
- (2) 黒龍会編『東亜先覚志士記伝(中)』(一九七四年、原書房、復刻版) 四三二頁。
- (3) 同上書 八七―八八頁。

- (4) 同上書 四四頁。
- (5) 同上書 四五頁。

二、「間島問題ニ就キ覚書」の目的

「覚書」では、間島問題に介入した日本の目的を次のようにいつている。

本来当局者方間島問題ニ着手セル必スシモ韓国民保護ノ小目的ノ為ニ非ス亦必スシモ間島尺寸ノ地ヲ争ハンカ為メニモ非サルヘク別ニ対露政策上大陸経営上急要己ムヲ得サルノ経綸ニ出テタルヤ明カナリ。

一九〇六年一月に、韓国議政府參政大臣朴齊純が伊藤統監に宛てた公文では、間島の朝鮮人保護が依頼されている。そして、間島に統監府臨時間島派出所を設置した日本政府は、終止「朝鮮人保護」を内外に表明したし、統監府派出所も「保護」を名目にして活動した。ところが「覚書」は、このような名目を明確に否定したうえで、日本の目的はあくまで「対露政策」と「大陸経営」にあったと述べている。この点では、

間島の帰属問題に介入した日本の意図は、はからずも「覚書」によって暴露されたといえよう。

さて「覚書」のいう「対露政策」と「大陸経営」とは、朝鮮、中国、ロシアの三国国境に位置するという間島の地理的条件にある。

間島ノ地点カ滿韓露接讓ノ要衝ニ当リ 苟クモ北滿州ノ宝库ヲ開キ東大陸ノ利源ヲ占メントスルニハ固ヨリ此ノ地点ヨリ進ムノ外ナク且ツ一旦有時ノ日滿州方向ヲ抑制センニハ必スヤ間島ニ拠リ吉林寧右塔乃至浦塩ニ望マサルヘカラサル。つまりロシアに対する戦略上からも、北

滿州(中国東北地方の北部)の利源を獲得するうえからも間島は橋頭堡に当るといのである。のちに「黒龍会」の牛丸友佐は、「北門の宝库」を唱えて日本海側から朝鮮と間島を結ぶルート的重要性を訴えたが、その発端をここに見ることが出来る。従って、日本にとつての間島問題は、たんに韓国統監府だけの問題ではなく、アジア政策上の大問題である。

故二間島問題ノ着手ハ寧口之ヲ我カカ対



東亜帝国政策ノ発動ト見做スヘク決シテ
統監府ノ一小問題ト見做スヘキニ非ス亦
之ヲ他ノ対清問題ノ諸懸案ト同一ニ輕視
スヘカラサルナリ。

「他ノ対清問題ノ諸懸案」とは、日露戦
争後の安奉線改築や撫順、煙台炭坑の返還
要求など、いわゆる滿州五案件といわれた
日清間の諸問題をさす。だが「覚書」は、
これらの諸問題よりも間島問題を優先させ
るべきであると強調している。間島問題は、
結局これらの問題と交換的に決着がつけら
れたが、この点では「覚書」の考え方は
真向から対立する結果に終ったことになる。
それはさておき「覚書」がめざす目的の前

には、朝鮮人にとつての間島の歴史や領有
権主張の根拠などは第二義的な問題となら
ざるをえない。「覚書」は、李朝が主張し
さらに統監府派出所がひき継ぐ形となつた
領有権の論拠を二つに要約している。

第一は、「土門」、「豆満」別流説である。
清國は白頭山境界碑に刻されている「土門」
は豆満江（図們江）をさすと主張したが李
朝は松花江の一流流である土們江をさすと
主張してきた。この点について「覚書」は
次のようにいう。

韓國ノ所謂豆満ハ「トンゲース」語ト一
マン（衆水合流ノ義）ノ音訳ニシテ古來
穩城以下ノ流域（布爾哈圖、海蘭、嘎呀、
三河流注シテヨリ下流）ヲ呼称セシモノ
ナリ其穩城ヨリ上流ハ別ニ於伊稜江ノ名
称アリ。

つまり豆満江の語源や発音から別流説を
立証するという方法である。従つて、定界
碑文どおりに解釈すれば、松花江以東の地
は朝鮮領土ということになる。ところが、
このような解釈は歴史上の事実とは食い違
うことになり、全面的に碑文に依拠するわ
けにもいかない。だが少なくとも老爺嶺山

脈以南、豆満江以北の地が完全な清國領土
ではないことは明らかであるという。

第二は、碑文の解釈から離れ、国際法上
の解釈といふべき見解である。

間嶋ノ地ハ其分界碑ノ有無ニ拘ハラス
實際ニ於テ二百余年來無所屬即無主權ノ
状態ニ在リシ。

間島は清朝にも李朝にも属さず、どちら
の主権もおよんではいかなかったというもの
である。李朝始祖の陵墓は元來間島にあつ
たが、往年の清朝の圧迫によつて朝鮮内に
移葬されたこと。他方、朝鮮に来る清朝使
節の接待供応は、鳳凰城以東では一切朝鮮
に任かされており、いわゆる辺門外におい
ては清朝の主権もまたおよんでいなかった
ことである。このような状態が変化したの
は一九世紀後半のことである。清國は延吉
庁を設けて間島の朝鮮人を管轄下においた。
しかし、韓國政府も領有権を放棄したこと
はなく、いぜん発言権をもつというもので
ある。

以上の二点から「覚書」は、韓國統監府
が間島に派出所を設置したことは当然の外
交上の措置であり、日本はこの方針を貫く

べきであるといっている。⁽⁹⁾ところが、これが「覚書」の結論なのではない。一転して、清朝と李朝との交渉過程に注目している。光緒八年（一八八二年）に、朝鮮国王がいったん豆満江が分界江であることを承諾する書を送ったといわれる点である。このため領有権に関しては、朝鮮側にも五分の弱点があるとい⁽¹⁰⁾う。いいかえれば、間島に対しては両国が五分づつの領有権をもつというきわめてあいまいな結論に終らせている。主張の正当性を決定的に重視しているのではないことを表わしている。

それよりも、ここで見落してはならないのは、「覚書」が論じる種々の説明の根拠である。これらは、決して連名者が独自に調査した結果だけを述べたのではない。「豆満江の語源については、湖南の「韓国東北疆界巧略」中の「地誌の研究」が部分的にほとんどそのまま引用されている。また、間島は無所属、無主権の地であるという見解は、当時統監府派出所総務課長であった篠田治策の説そのままである。だが「覚書」への篠田の影響はこの部分だけであるのに対して、湖南はさらに核心となる部分に大

きな影響を与えている。

注

- (1) 二九八―二九九頁。
- (2) 金正柱編『朝鮮統治史料（第一巻）』（一九七〇年、宗高書房）五〇九頁。
- (3) この点については、韓国の申基碩氏も指摘されている（四〇頁）。因みに申氏は朝鮮戦争直後には間島に注目しており、「間島帰属問題」（中央大学校『中央大学校三十周年記念論文集』一九五五年）を発表している。
- (4) 二九九頁。
- (5) 代表的なものとして牛丸潤亮「最近間島事情」（一九二七年、朝鮮及朝鮮人社）がある。
- (6) 二九九頁。
- (7) 二九八頁。
- (8) 二九八頁。
- (9) 二九八頁。「覚書」の記述では、統監府派出所の開設を「昨年」すなわち一九〇八年（明治四一年）としているが、明らかに「一昨年」の誤まりである。



(10) 二九八頁。

(11) 厳密に言えば、外務省に提出された

「間島問題調査書」中の一部である。

ところが筆者はこの調査書を見ないであ

るので、「内藤湖南全集(第六巻)」

(一九七二年、筑摩書房)に収録され

ている本記をとり上げた。内藤乾吉氏

によると、「韓国東北疆界巧略」と「間

島問題調査書」とは内容のうえで共通

した部分かなりあるといわれている

(七〇〇頁)。以下、「全集」と略す。

(12) 後年のものであるが、篠田治策「間

島問題の回顧」(一九三〇年)では、

「間島は清韓両国の何れにも属せざる、

自然に形成せられたる無人の中立地帯

であつた」(一五頁)と述べられている。

三、「覚書」と「間島問題協定案私議」

「間島問題協定案私議」のもっとも大きな特徴は、第三国である日本が間島の領有権を滿州侵略のためにとりひきに利用しようとしたことであり、そこに居住する多数

の朝鮮人の意思と権利を完全に無視したことである。湖南は、このような立場にたつて間島問題に決着をつけ、同時に朝鮮人に対する日本の裁判権や吉林から朝鮮に達する鉄道の敷設権をはじめとする種々の權益を獲得しようとした。ここでは「私議」との比較において「覚書」の中心となる部分のみをみてみよう。まず、間島問題の決着方法について次のようにいっている。

以上ノ所論ニ基キ吾人ハ茲ニ反復深思
解決ノ方法ヲ講究シ努メテ名ヲ避ケ実ヲ
取ルノ方針ニ從ヒ少クモ左ノ条件ヲ貫徹
スベキモノト認ム

「名ヲ避ケ実ヲ取ル」ものとして、六項目からなる条件をかかっている。「覚書」の核心である。

第一、吉長鉄道ヲ會寧迄延長スル事

第二、東西間島少クモ東間島即延吉庁

管轄内(統監府ノ所謂東間島)ハ之

ヲ清韓両国民雜居ノ地域トスル事

第三、在間島ノ韓民ハ我官庁管轄ノ下

ニ任意ニ自治制ヲ組織シ清国官庁ノ

干渉ヲ受ケサルコト

第四、在間島韓民ハ清国ニ対シ納租ノ

義務ヲ有スルハ勿論同時ニ土地所有
権ヲ有スル事

第五、東西間島即延吉庁及敦化県管内

ノ森林鉱山ヲ開放スルコト

第六、以上ノ五ヶ条ヲ清国政府ニ於テ

承認スルニ於テハ間島ノ領土権ハ讓
ルモノナル事

ルモノナル事

吉長鉄道(吉林―長春)については、すでに一九〇七年に清国との間に工事借款契約が成立していた。この鉄道を吉林からさらに朝鮮の會寧まで延長しようというわけである。鉄道敷設の目的は北滿州にあり、間島はその足場である。まさに「覚書」の目的に合致する。だが、なによりも湖南の「間島鉄道意見」の提議そのままである。これは、間島協約第六条となる。

清国延吉庁管内での朝鮮人の居住権について、「覚書」と「私議」は一致している。湖南は土地所有権や各種營業権を要求したが、いうまでもなく朝鮮人の居住権を前提にしたものである。間島協約第三条の墾地での居住権として具体化した。

ところが第三の清国行政権の否認と朝鮮人による一定の自治は、「覚書」独特の主

張である。しいて「私議」の中に共通する部分をさがすとすれば、清国行政権否認に關しては、理事官の駐紮や日本人と朝鮮人に対する管理、裁判権の要求にその意図が含まれているといえるかも知れない。「私議」のこの部分は、間島協約第四条で日本官憲の清国側裁判への干渉権となつたが、間島での清国行政権は承認されている。朝鮮人の自治権の要求は、間島協約にはおろか「私議」においてもまったく考えられない問題である。

清国への納租義務と朝鮮人の土地所有権についても「私議」と同様である。この点は、協約第五条の土地家屋所有権と第四条の清国民との同等待遇の規定となり、三者は完全に一致している。

延吉庁と敦化県の森林、鉦山の開放は、「私議」の各種營業権の保障、日本人の既得権の承認に含まれており、また生產品の韓国への輸出の自由とも一部分で共通する。だが、森林、鉦山の開放要求が敦化県にまでおよんでいる点が「私議」とは異なつており、「覚書」の意図する權益が必ずしも間島に限られていなかったことをものがたつ

ている。しかし、協約では結局実現されなかつた。

最後の第六が、間島の領有権についてである。第一―五までの条件と交換に領有権を譲渡するという。湖南は、「私議」の冒頭で次のようにいっている。

間島即チ延吉庁管内ニ於ケル清国ノ領土權ハ寧口之ヲ承認スルコトトシ其ノ交換問題トシテ清国ヲシテ左ノ諸件ニ同意セシムルヲ要ス⁴⁾

種々の条件を提示して領有権と交換するという方法である。「覚書」と「私議」が、余りによく似た方法で決着をつけようとしたことに驚かされる。

「覚書」では、これらの条件を清国に認めさせるため、さらにいくつかの方策を提起する。まず、機会が到来するまで表面上はあくまで領有権を主張し続けなくてはならないという。次に、解決を急ぐことなく内外の形勢を察して一挙に裁断すること。三つめに清会鉄道（清津―會寧）と吉長鉄道の竣功を急ぐことをあげている。清津と

會寧間には日露戦争末期に日本軍の輕便鉄道が敷設されていたが、ここでは本鉄道へ

の改築をさしたものである。清会鉄道と吉長鉄道の建設は、吉会鉄道敷設権獲得に向けて東西両方向から圧力を加えるものといえる。このことは、「覚書」においてはすでに清津を起点にした長春までの鉄道計画が立案されていたことを示している。

「覚書」と「私議」では、間島の領有権を放棄するという考えで一致しており、しかも「覚書」が提示する交換条件の多くは「私議」が包含している。両者の共通性は明らかである。反面、異なる点もまた明らかとなった。朝鮮人自治権の要求である。「覚書」のこの特異な主張が、連名者のどのような意図からでたものかは大きな疑問である。⁵⁾

注

- (1) 二九九頁。
- (2) 二九九頁。
- (3) 「私議」と同じく「間島問題私見」に含まれており、「全集」に収録されている。とくに五六七―五六八頁を参照されたい。
- (4) 『全集』五七〇頁。

書評編集委員 募集!!



『書評』は私たちによる文化形成のための印刷メディアです。あなたも『書評』を創ってみませんか。
「雑誌」に興味のある方、思想・文化運動をやつてみたい方は、『書評』編集をはじめ、講演会や映画上映をやってみましょう。

編集委員にお気軽に声をおかけ下さい。

●連絡先 生協本館3F 組織部内

☎387・9998 (直通)

☎388・1121 (内線4821)

(5) 筆者は間島に移住していた「進会」とのかかわりに注目しているが、まだ充分につかみきれしていない。

四、湖南と「覚書」を介する人物

最後に、湖南の調査研究がどのような経路をたどって「覚書」に反映したのかという疑問が残る。朝鮮での湖南の調査活動において「黒龍会」や「進会」が積極的な援助を行ったのは事実だが、湖南と「覚書」の連名者が間島問題で直接連絡をとり会っ

たことを確認するには致っていない。

しかし、「覚書」の連名者が湖南の研究をかなり詳しく知っていたことはまちがいない。それには二つの関係が考えられる。

一つは中井喜太郎を通じてであり、もう一つは外務省を経由するものである。

中井喜太郎は、「国民同盟会」や「対露同志会」で連名者に劣らない活動をしており、その後も親密な関係をもっている。そのうえ彼は、湖南と同じように早くから間島問題と深くかかわった。むしろ湖南よりも早いかも知れない。中井によると、間

島への関心が初めてもち出されたのは「対露同志会」と彼が組織した「朝鮮教会」の場であったといわれる。日露戦争以前のことになる。だが実際に彼が間島に足を運んだのは、戦後の一九〇六年である。この年の四月と一〇月に二度の踏査を行い、「咸鏡道経済事情視察報告書・咸鏡北道及間島ノ部」を韓国統監府に提出している。

翌一九〇七年には「間島問題ノ沿革」を書き、湖南の「間島問題調査書」とほとんど同時に外務省に送られた。ところが、中井と湖南の間島問題へのかかわり方をみると



際だった相違がある。中井が韓国統監府の囑託として統監府や韓国駐劄軍との関係が強かったのにくらべて、湖南は陸軍參謀本部や外務省という中央部の依頼で活動した。しかし、中井と湖南にまったく接触がなかったわけではない。それどころか、朝鮮で二度にわたって意見を交換する機会もっている。一回目は一九〇六年八月に京城、二回目は一九〇八年八月に咸鏡北道鏡城においてである。とくに注目すべきは二回目の会見である。湖南はこの時、翌年の「私議」に大きな影響をおよぼすことになる吉

林への旅行途上にあり、中井は咸鏡北道事務官のかたわら朝鮮人の間島移住を勧誘していた。湖南と中井は、かつて高麗と女真が戦ったのは間島か朝鮮かという史論を交換したといわれている。だがそれだけではなく、現実の間島問題についても意見が交換されたことは十分に想像できる。

湖南と外務省との関係についてはいうまでもない。一九〇五年末に外務大臣小村寿太郎の顧問として北京に同行して以来、間島問題の調査研究をとおして密接な関係をもった。湖南の進言は外務省から高く評価されたが、外務大臣に直接伝わっていたのではなく、すべて外務省政務局長をへていた。当時、外務省は政務局と通商局の二局制で、政務局長は通商以外の一切の外交案件をとりあつかう要職である。局長は山座田次郎であった。

間島問題において湖南と山座は、たびたび重要な時点で連絡をとっている。まず、湖南が間島問題の調査を依頼されたといわれている一九〇五年二月の北京において、次に翌年五月、首相官邸で開かれた「満州問題に関する協議会」の終了後、

山座は大阪の湖南に上京を依頼する書簡を送っている。この年の七月、湖南は外務省囑託として京城から奉天への調査旅行に出発した。旅行途中の一月、湖南もまた滞在中の奉天から山座へ電報をうっている。さらに一九〇七年九月には、山座は「間島問題調査書」がいつ完成するのかを湖南に問い合わせている。そして湖南は、数冊に分けた調査書を一月中に提出し終えた。その後山座は、間島問題の決着を待たず、一九〇八年六月付で駐英国日本大使館參事官を命じられて九月にはロンドンに赴任した。従って「覚書」や、「私議」が提出された時には日本にはいなかったわけだが、湖南と外務省との関係はむしろ存続した。

山座田次郎¹⁰⁾は、一八六六年の福岡生まれで一九二二年に東京帝国大学法科を卒業し、一月に釜山の日本総領事館に勤務した。一八九五年に外交官補に任官後、副領事として上海に赴任したが、日清戦争に際して再び釜山に戻った。翌年五月に仁川へ転任して一月の「閔妃事件」に直面した。事件の中心人物だった三浦公使に代って、

当時政務局長だった小村が急遽駐韓公使として赴任してきた。小村とはこの時に知り

合い、のち「小村の片腕」とか「懐刀」といわれるようになる。一月にいったん駐

英国日本公使館三等書記官としてロンドンに赴任したが、すぐに翌一八九九年五月に

は韓国在勤を命じられて帰国した。一九〇一年一月、桂内閣の外務大臣となった小

村の下で政務局長となった。日本とロシアの関係が悪化した一九〇三年には、同郷の

後輩である広田弘毅と平田知夫を東京帝大在学中のまま朝鮮、満州、シベリアへ偵察

旅行に派遣した。⁽¹⁾かねてから対露強硬論を唱えていた山座は、日露戦争直前には政

務局長の職にありながら「対露同志会」と積極的に交わった。「覚書」連名者の多く

と交際をもち、とくに小川、河野、大竹とは同志ともいえる間柄であった。⁽²⁾戦後

「ポーツマス条約」や「日清満州善後条約」の調印でも小村に同行した。小村とのコン

ビネーションをいかななく發揮したのは、米國鉄道工ハリマンの満鉄協同経営案の破

棄においてである。桂内閣との仮調印にまごぎつけていたハリマンの憤慨はすさま

じく、その後の日米関係に少なからぬ影響をおよぼした。

山座についてももう一つ注意すべき点は「玄洋社」との関係である。福岡では「玄

洋社」の前身の「向陽社」の影響を受けて育ち、外交官になってからも玄洋社員として

親密なつながりをもっていた。最初の英國勤務から帰国直後、「大隈重信の右腕」と

いわれた当時の内閣法制局長官神輿知常の長女と結婚したが、媒酌は初代の玄洋社

長平岡浩太郎であった。また、外交官をこころざして上京した広田と平田を山座に紹

介したのは頭山満である。以後山座は、広田を弟のようにしてめんどうをみ、二度目の

英国在勤中に外交官としての訓練をみっちりほどこした。

このようにみれば山座は、湖南、外務大臣「覚書」連名者の三者のかなめにいたこ

とがわかる。間島問題についての湖南の進言は外務大臣に伝えられるとともに「覚書」

にも反映するわけである。頭山にはたらきかけて湖南の提議の実現を政府に迫るよう

画策したのは、あるいは英国にいた山座だったのかも知れない。

注

(1) 中井喜太郎については、『東亜先覚志士記伝(下)』三三七―三三九頁に よった。

(2) 中井と間島問題については、拙稿『北朝鮮ルート論』と朝鮮人の間島移住(本学『経済論集』第三七巻第四号、一九八七年)を参照されたい。

(3) 中井錦城『朝鮮回顧録』(一九一五年、精業研究会出版部)一七九頁。

(4) 内藤湖南『韓満視察旅行日記』(『全集』三九五頁)による。

(5) 大里武八郎『北韓吉林旅行日記』(『全集』四〇五頁)および中井前掲書二五八―二六〇頁。

(6) 『全集』三九二、六九七頁。山座と湖南との関係については、三田村泰助『内藤湖南』(一九七二年、中公新書)一九二―二〇頁をも参照されたい。

(7) 内藤戊申編『内藤湖南・北韓吉林旅行日記』(『朝鮮学報』二一・二二合併特輯号、四二七頁)による。

(8) 『全集』四〇一頁。

(9) 同上集 六九九―七〇〇頁。

(10) 山座円次郎については、長谷川峻『山座円次郎』(一九六七年、時事新書)と一又正雄『山座円次郎伝』(一九七四年、原書房)によった。

(11) 山座と広田弘毅との関係については、長谷川、一又前掲書と岩崎栄『広田弘毅伝』(一九三六年、新潮社)によった。

(12) このうちでもとくに親しかったのは、東京帝大法科の同期生だった小川平吉である。小川は、日露戦争ではロシア沿海州南端のポシエツトまで占領すべきであると主張したし、間島協約締結後においてさえも協約の改定をもくろんだ。これらの文書については、小川平吉文書研究会編『小川平吉関係文書・2』(一九七三年、みすゞ書房)に収録されている。

おわりに

頭山満は、湖南の「間島問題協定案私議」を強力に支援する役割を果たした。しかし、一方で頭山には間島の朝鮮人について、湖

南とは明らかに異なる別の意図があったことを見逃すわけにはいかない。このことに関して、他日を期して考えてみたい。

(にし) しげのぶ・本学経済学部卒業生)

日本中国

ことばの来往 ゆきき その29

芝 田 稔

「新語」になつた日本語彙

中国が「四つの現代化」をめざして行政改革と開放経済に切り変えてから早くも十年を迎えている。こうした社会の変化によって、多くの新しいことばが生まれつつあるのだが、ここでは日本の語彙で中国語の「新語」となつたものを、二三拾ってみようと思う。

これらのことばは、もともと日本の語彙であるから、いちいち説明するまでもないのであるが、中国にとつては真正正銘の「新語」であるから中国ではそれをどのように説明しているのか、それを紹介しよう。

「家電・ジアディエン」家用電器的簡称（家庭用電器器具の略称）。その注釈によると、最近数年間に表れた新しい略語。人民生活の水準が向上するに伴つてこのことばが、頻繁に日常用語の中に出てくるようになってきた。現代中国語の語彙は「二音節化」される趨勢にある。このことばはもともと「家用電器」といわれていたのであるが、さらに二音節化されて「家電」となつた、というのである。

とすると「家電」という「新語」は、日本語の「家電」をそのまま直移入したものではないとも考えられる。現に一九八四年版『現代漢語表』（現代中国語彙十万余

語をアルファベット順に発音で示した単語集一五三三頁、中国標準出版社)には「家用电器 Jiayong dianqi」が収録されているのである。だが結果的には日本語彙の移入と見放してもよいかではない。日本では「家電産業」「家電メーカー」などといううことが使用されてからすでに久しいからである。

家電商品暢銷⇨家電商品の売れ行き上々(『文滙報』

一九八六年二月十一日)

我国家電產品進入家庭時間不長、市場上品種很少、門類不全、有待大力發展。⇨わが国では家電製品が家庭に入りだしてからまだ日が浅く、市場には品種が少なく、その品数もそろっていないので、大いなる発展が期待されている。(『現代家庭』(一九八五年第五号))

「融通 ロントン」^て手許にある中国刊行の辞典を見ても(通融 トロント⇨①人にやりくりをつける②短期間金銭を貸し借りすること)ということばはあるが「融通」という単語は見当らない。であるから曾てこの連載で「漢語構成のちがいがい」の中で、日本語の「融通」ということばは、中国では「通融」というように、漢字を上下逆にして表わす。それはちょうど「売買」を中国語では「買賣」と表現するのと同じことだ、と述

べたことがある。

さて「融通」であるが『辞書研究』(一九八七年三号)によると、次のように説明する。

「融通」ということばは「融洽 ロンチア⇨うちとける、溶け合う」と「流通 リウトン⇨流通する」とが凝縮して成ったことばであり、現代語としてまだ辞書に収録されていないが、近年来金融市場の改革に伴なって常用の新語となったものである。

次に「退役 トイイー」ということばがある。これはもともと中国でも用いられており、日本の「退役軍人」の場合と同じく、中国でも「軍人が現役を退き、或は



預備役の期間が終った時に退役となる」(『現代漢語詞典』の説明)ことで、軍隊用語であるが、最近ではスポーツ選手が選手生活から引退することを指すことばにも用いられている。

中国乒乓球隊目前处于老隊員退役、新隊員冒尖不
多的狀況。(中国卓球界は目下のところベテラン選
手が引退し、新選手でずばぬけたものが少ないと
いう状況にある。『光明日報』一九八五年三月四
日)

因みに中国には「退役」と同じ意味のことばとして「退
伍トイウー」というのがある。してみると「退役」「現
役」「予備役」という中国の軍隊用語は、皆て日本語か
らの移入語ではないか、と思われるのであるが、この
検証は後日にゆずりたい。

中国大卒者の就職に異変

一枚の通知書をもって何千何万という大学卒業生が、
大学当局から決められた職場に向って一斉に行進して
行く——このような開放後に発生した大卒者の就職風
景も開放政策を実施中の今日では、やや様変わりしてき
たようだ。

昨年中国では総数三十六万の大卒者を社会へ送り出
している。又彼ら彼女らは「国家の配置命令」に従っ
て「四つの現代化」の第一線に向って旅立ったのであ
るが、その内容は例年とは可成り違っていた。とい
うのは、就職の配置を決めるに当って、以前のように書
類選考だけで決定されるのではなく、「企業面接」とい
う新しい方法が組み込まれたことよって、多くの問
題が浮上し、それが初めての試みであっただけに、学
生はもちろん、大学当局や父兄たちに与えた影響も大
きかった。以下「人民日報」(一九八七年十一月九日)
周慶記者の「就職戦線、その配置をめぐる」から取
材してみよう。

その第一の問題は、何といっても「企業面接」によっ
て、第一次配置決定者の中から不採用者が出たことで
ある。こんな現象はこれまでにはほとんどなかったし、
しかも門前払いを食った学生の中に、女子学生が二〇%
近くも含まれていたことである。北京市では六五〇名
が面接で不採用になったが、そのうち一二三名が女性
であった。また成都の科学大学では不採用二一名中、
女性が六名であったという。

こうした現象は各地の大学でも見られた。上海市で
は二五二名、江蘇省で一九八名という数字がある。ま

投稿募集!!



短評を書いてみませんか?

最近一年間に発行された本の中で、自分がこれはぜひ人にも勧めたい、あるいは、強く印象づけられた本の短評を原稿用紙(四百字詰)二、三枚に。

☆ジャンルは自由、締切は毎月末。

☆連絡先 〒565 吹田市千里山東3-10-1

関西大学生協同組合『書評』編集委員会

☎ 387-9998 (直通)

388-1121 (内線 4821)

た個々の大学で第一次割り当てで不採用になったものを見ると、北京大学五八名、中国人民大学五〇名、上海復旦大学六二名であり、その他天津南開大学、南京大学、山東大学、武漢大学、四川大学等でも可成りの数に上った。

もっとも第一次面接で採用を拒否された学生たちでも上級機関から下級機関へ、大企業から中小企業へと就職先を変更することによって、全員が一応落ち着いた模様であるが、学生たちにとっては、以前のように「卒業証書」さえ手にすれば、すぐに良い就職ができた時代ではなくなつたのである。

中国では「文化大革命」(一九六六年六月—七六年十月)中、全国の大学という大学はほとんど閉鎖された。その結果青年インテリや技術者が不足し、八〇年代初頭からは大学を出さえすれば好きなところへ就職ができた。具体的な活動や仕事は就職後職場で仕込むといった具合でよかつた。ところが今日ではその様子が、がりと変わり、人材を必要とする機関や企業側も自己主張ができるようになってきたのである。今回の場合を見ると:

① 大卒者の配置を決めてくるのは大学と主管部門であるが、その人物を必要とするか否かの主



権は採用者側にある。

② 人権費の総額に限度がある。余り活動しないものでも現職がいる限り、新人の割り当て通りに収容できない場合がある。

③ 大学、主管部門、受入機関三者の連係がうまくいっていない。——例えば学生を配置する場合、大学と主管部門の連絡がついているが、受入機関との連絡がついておらず採用にならなかった。大学と企業の連絡がついているのだが主管部門が知らないので採用するにも、方法がなかった。企業では八方手を尽して募集に回ったが、さて各地の大学生が一度にやってくると、先着順に採用し、後から来たものが門前払いを食った。

しかし、なんといっても学生側にも欠点がある。その第一は成績不良。再試験を受ける者は当然不採用となる。第二は能力に比べて高望みする者。第三は給料に対する要求が不適當。第四は職場に不適合と判断された。

一般的には総合大学の方が単科大学よりも不採用者が多く出た。専攻部門では光学、レーザ、史学系の就学率がよくなかった。これに反して政治学、法律学、管理経営学の専攻学生は需要を満たし切れなないほどの

人氣があつた。

現在上海の大学生の間では、農村地区で一戸建ての家に住むよりも、上海市内ならベッド一つの部屋でも、それの方を選ぶ、というほど大卒者の大都会への執着熱は高い。こんな例もある。北京在住の子弟で、地方大学を卒業した成績優秀な学生が天津のある研究機関に第一次配置を決定されたが、彼はそれを断り、自ら進んで北京の一工場に就職した。その理由として彼は「北京に住むことが第一条件です」といつていた。

また西安市の陝西師範大学では一九七五年から八五年までの十年間に、延安地区に対して一三〇名の卒業生を配置したが、追跡調査によると現在わずか四〇名しか現職に止ま^{とど}まっていない、ということである。

今回は新疆、青海、寧夏、甘肅、雲南、貴州、チベット、広西、内蒙古、黒龍江等の僻遠の地十省に対し一万五千名の大卒者が配置されたが、これは十省の必要人材の七〇%に当り、まだまだ不足しているのである。

この矛盾を処理するために、清華大学、上海交通大学、華東師範大学、華東工学院、南京工学院、西安交通大学等の重点工業系大学では、僻遠の地や寒村からの学生を推薦入学させたのであるが、その結果が期待されている。

(しばた みのる・文学部教員)

— 連 載 —

研究余滴 ヴェルレーヌ 9

『叡智』の世界

山 村 嘉 己

1

前回、遂に実を結ぶことのなかった「独房入り」を紹介しながら、その掉尾をかざる「主が私にのたもうた」で始まる長詩を示し、これはそのまま「叡智」の世界の中心部を形造る重要な作品であることを述べた。事実、「叡智」の発表は後で述べる経緯を経て、まだまだ数年先になるのであるが、この詩はその「叡智」のⅡの4に置かれ、フランス詩史の中でもっとも秀れた宗教詩集と称されるこの詩集の中核をなしているのである。たとえば、V・P・アンダーウッドは「この詩集は三

部に分たれるが、その第二部はいわばこの回心の殿堂の聖域中の聖域をなしている、第一部と三部はその側廊だ。第一部はその大部分は第二部より後に作られているが、時には不安げな、時には昂揚した宗教的なトーンによって読者に第二部への手引き役を果している。第三部は《風景》を巧みに使って《文明》への静かな諦念を占めしている。それはそれほどくにキリスト教的な靈感を含んではいえない回心前のいくつかの詩、とくに風景詩を含んでいる。詩人はこの世のもろもろの情景に身を交えることなく接するキリスト教徒の役割にうまく合わせるように気楽にこれらの詩





「叡智」の初版本

を採用しているのだ。したがって、ヴェルレーヌはこの詩集の構成を年代的な基準よりも芸術的なそれにしたがって作りあげたもので、自らの宗教的な意識の深化の明白な進行に正確に合わそうとは考えていない。「叡智」一九四四」とみごとに説明しているし、かれほどⅡのみを評価しないキュエノさえもまた、「『独房入り』の詩篇を除いてみよう、そうすれば『叡智』はピサの斜塔よりもっと危険な傾きを示すだろう」と賛嘆の色を隠そうとしない。ここで前回の後を受けて

「その七」以降を紹介してみたい。

迷いに迷いを重ねて、ようやく主への愛情をむしろ「愛さねばならぬと感じている」と告白した詩人は「その六」においては、「こんなに縮みこんだ身体と病んだ心をもつ自分でも、御身はあの使徒を抱きとめたように、御身の胸に抱きとめてくれるのか、それは可能なのか」と問いかけるに至っている。「その七」はこれを受けて次のような三つのソネットの集まりでできている。

——たしかだ、わが子よ　もし汝がそれに価したい
と望むなら

それはできる。ほら　わが教会の開かれた腕に向つて

愚かにも迷う汝の心を進み行かせよ

咲き誇る百合に飛び行く雀蜂のように。

わが耳に近づき　そこに囁くののだ

勇敢に　率直に　卑下の心を。

侷りもなく言いつくろいもなく　すべてをわれに告げよ

この上ない後悔の花束をわれに捧げよ

かくて 心晴れ安らかに わが卓へ来たれ
汝に香わしい聖餐を与え祝福しよう
天使もただ侍るしかない聖餐を。

そして 不変のぶどう酒も与えよう
その強さ その甘さ その良さに
汝の血は不死への種を育くむだろう。

.....
かくていざ この愛の秘蹟をつつましく信ぜよ。
これあればこそ汝の肉体と理性はわがものとなる
そして何よりも先ず幾度もわが家に来たり
渴きをいやす《ぶどう酒》にあずかり

それなくしては人生も裏切となる《パン》にあずか

り
わが《父》に祈り わが《母》に哀願するのだ

追われてこの世にある汝の身に
叫びもたてず羊毛を供する子羊となり

麻布と無垢とによそわれる幼な子となり
汝の哀れな自己愛と本性とを忘れ

そしてついには少しはわれに似ることを

ヘロデとピラトとユダとペトロのあの日々
苦しみ苦しみ 極悪の死を死んだわれ
汝と同じわれに似ることを許されたいと。

.....
甘美なるがゆえに消しがたい喜びとなった
その義務への熱情に報いるために
わが初物の味を汝に教えよう。
心の平和 貧しくあることへの愛 神秘にみちた



ヴェルレーヌ (1882年頃)

わが夕べ　心は静かな希望に向つて開き

わが約束にたがわず《久遠の盃》をくむと信じるとき

つつましやかな空に　月静かにすべるとき

バラ色にそして暗くアンジェラスの鐘の鳴りわたるとき

わが光りの中の昇天を待ち

わが日頃の慈愛の中の果てしない目ざめを待ち

永遠のわが頌歌の音楽を待ち

つきせぬ恍惚と知識とを待ち

わが愛した汝の苦痛　今はわがものともなった

その苦痛の優しい輝きに包まれ　わが内にある

ことの喜びを知らせよう

ここでは自らの苦悩をキリストのものとなぞらえるほどの熱狂にたかまった詩人の姿が浮き彫りとなっている。後は「その八」の有名な恍惚と不安の二重奏が待つばかりである。

ああ　主よ　私はどうしたのか　ああ　私は今狂わ

んばかり喜びの涙に濡れて　ここにいる御身の声を私を喜ばせ　同時に私を苦しめる　喜びも苦しみもすべてが同じ魅力　なのだから。

私は笑い泣いている　そしてあの声は戦場に武器をとれと鳴り渡るラッパの響きと同じだ　戦場には大楯に乗る青や白の天使が見え　ラッパの響きは私をつかみ雄々しい緊張へとさらって行く

私は選ばれてあることの恍惚と恐怖を感じている　私は価しない　しかし御身の寛大さを知っている　ああ　なんとという努力　しかしなんとという熱情

そして今ここにつつましい祈りに溢れて私はいはる苦悩はなお果てず　御身の声にめざめた希望も薄れたりするが

ああ　それでもおののきながら私は祈る

そしてこの「その八」の抑制した恍惚の後に

——哀れな魂よ　この通りなのだ

という6シラブルの、つまり「その八」の最終行の後半を受ける形の「その九」の一行が添えられ、これは一つの決意に似たものをわれわれにつよく感じさせてこの長大な宗教詩は幕を閉じる。

2

《この本の著書はいつも現在のようによく考えていたわけではない。長い間、現在の腐敗の中を放浪し、それなりに誤まちを犯し、無知を味わって来た。多くの苦痛を味わい、そのおかげでかれは目ざめたのだ。

神の恩寵めぐみがかれを目ざめさせ給うたのだと言ってもよい。かれは長年気づかずにいた《祭壇》の前にひざまづき、《最善》の神を崇め、《全能》の神に祈りを捧げ、《教会》の従順な子となり、たとえ価すること薄くとも善意に満ちている。

自らの心弱さの思いと数々の愚行の思い出が、かれにこの書物の執筆を思い立たせた。この書物は長い文学的な沈黙の後で公にする初の信仰告白である。かれの願いであるが、どうかこの中に、今キリスト教信者となった著者が、かつてつい昨日まで自らもその一員として犯した憎むべき風習をもった罪人た

ちに持たねばならぬ慈愛の心に反するものは何一つ見出されざることを。

……
著者はきわめて若年のとき、つまり十年あるいは十二年も前、懐疑的な、また哀しむべき軽佻な詩を公にしたことがあるが、ここでは、いかなる不協和音もカトリック信者の繊細な耳を傷つけることはなからうとあえて信じた。これはかれのもっとも誇るべき希望であるとともに、もっともすばらしい栄光といえるであろう。》

これは一八八〇年七月三十日、パリにてと記された『叡智』の初版の序文である。数年にわたる冷やかかな文壇の黙殺に堪えてこの詩集を世に問うからには、これだけの自信と見込みがあるのは当然のことだろう。

だからこの詩集には、すでに紹介したように、だれもが認めるきわめて意識的な構成があったことは言うまでもない。そしてその構成は製作年代によるものではなく、多く美学的見地からのものであることもすでに述べた。1でふれたアンダーウッドの解説に対して、ルイ・モリスはこの三部をヴェルレーヌの《宗教的な心理》の三段階を示すと解し、第一部を *ascétique*（苦行



ヴェルレーヌ (1882年頃)

理)の三段階を示すと解し、第一部を *aesthétique* (苦行者的) 第二部を *mystique* (神秘的) 第三部を *pittoresque* (叙景的) と名づけている。《第一部は古い自我に対して新規改宗者が仕掛ける戦を語り、第二部はイエスが詩人を待ち、崇高な会話をまじえるまったく神秘的なものであり、第三部はとくに叙景的で、すでに死んだと思われていた詩人は超自然的な感覚を身につけ、より一層豊饒な影像をもってわれわれのところへ帰ってくる》(一九四八年版『叡智』)と、かれはコメントをしている。

一方、この二人の説を紹介しているキユエノは、《た

しかにこの作品集は「ああわが主よ御身は愛もてわれを傷つけ給うた」と「わが主はわれにの給うた」の有名なソネット群をきわめて神秘的な核とする三部作の様相を示している」としながら、年代的にも、美学的にも「独房入り」からの七篇(Ⅱ4、Ⅲ2、3、4、5、7、二)を抜きにしては文句なく『叡智』の世界は破綻を来すだろうと断言する。いずれこれらの詩篇についてはふれずにはおれぬだろうが、ここでは先ず第一部の不安と苦痛に喘ぐ苦行僧的面影を伝える一、二の作品を紹介してみよう。

黙々と駒を進めて行く善良な仮面の騎士

《不幸》はその槍で私の古い心臓を貫いた

私の古い心臓の血はひたすら朱色の噴水となって飛び散り 陽を浴びて 花々の上に霧と消えた

私の瞳は闇とかげり 叫びが口を突いて出た

そして私の古い心臓は 恐しい戦慄の中で死んだ

そのとき 騎士《不幸》は近づき

地面に足を下ろすとその手で私に触れた

鉄の手袋をはめたその指が私の傷口に入り込み
一方 激しい声で掟が読みあげられた。

ああそのとき 鉄の指の冷たい接触到

心臓が私に再生した 純潔で誇り高い一つの心臓が

ああそのとき 神聖な貞潔の心に燃えて

若く善良な一つの心臓が私の胸に高鳴ったのだ。

そこで 私は震えながら酔い痴れて、半ば信じがた

いままに

神のみ姿を見る人のように茫然としていた。

しかし 善良な騎士は馬にもどり

遠去かりながら 会釈を送ってよこした。

そして私に叫んだのだ（今でもその声は耳に鳴る）

（とにかく慎重に、それは二度と起らぬことなのだ
から）

これは序詩として、二度とくり返しえない再生の喜

びと苦しみを歌ったものだが、過去の思い出はいく度
かかれの心に蘇り、悪い誘いをくり返す。

いつわりの輝かしい日々は輝いた 日がな一日

ああ哀れなわが魂よ

そして今その日々はここにある 夕陽の赤銅色にふ
るえながら

眼を閉じよ 哀れな魂よ そしてすぐにもどって来
るのだ

もつとも悪しき誘惑の一つだ。汚濁を逃れよ。

あの日々は輝いた 日がな一日 燃えさかる霰とな

って長く尾を引き

丘の上に豊かにみゆるぶどう畑を打ちたたき

谷間ではすべての麦のみどりを倒し

紺青の空、お前を呼ぶ歌う大空を荒らしつくして。

ああ蒼ざめよ そしてゆっくり手を合わせて立ち去

るのだ

もしもこの過ぎた日々が美しい明日を食いつくそう
とするなら

もしも古い錯乱が今も進行しているとするとするのなら

その無邪気な祝婚歌の中に残る

この声を受けいれ給え

さあ、哀しみをやわらげようとすることほど

魂にとって嬉しいことはない。

魂は今苦しんでいる 動きつつある

魂は憤ることなく悩んでいる

そしてその道徳は何と明らかなことか……

聞き給え げに賢明なこの歌を。

他にも〈何ゆえに悲しむのかわが魂よ／努力せよ望まれているときに／最後の努力がお前を望んでそこまできているといふのに／死ぬほどまでにどうして悲しむのか〉と苦痛を洩らしたり、〈大都会の子として生まれ／汚れた反逆の子として生まれ／私はそこにすべてを求め、見出し／せい一ぱい夢を追い／それでも、それから残ったものは何一つないのだから／私は軽く別れを告げたのだ／変わるかも知れないすべてのものに／快樂に 幸福そのものに／そして私の愛するすべての物に／御身 私のやさしい主を除いて……〉のような、まさに不安と苦悩に迷う詩人の心を打ち明けたものは枚挙にいとまがない。

3

かくて第一部で二十四の詩篇にその心の動揺を盛りつつも、詩人は第二部の殿堂に一挙に参入する。すでにその中心のIVは紹介をした。ここにはそれと並び称されるIを展開してみよう。

おおわが主よ 御身は愛もて私を傷つけ給うた

その傷口は今もなおふるえうずく

おおわが主よ 御身は愛もて私を傷つけ給うた

おおわが主よ 御身の恐れは雷のごとく私を打った

その焼け傷は今もなおそこであちふるえる

おおわが主よ 御身の恐れは雷のごとく私を打った

おおわが主よ 私はすべてがいやしいと知った

そして御身の栄光が私の中に動かぬものとなった

おおわが主よ 私はすべてがいやしいと知った

わが魂を御身の「ぶどう酒」の波に溺らせ給え

わが命を御身の食卓の「パン」に溶け入らせ給え

わが魂を御身の「ぶどう酒」の波に溺らせ給え

ここに注ぐことのなかつたわが血がある
ここに苦惱に価せぬわが肉体がある
ここに注ぐことのなかつたわが血がある

ここに恥じ赤らむしかないわが額がある
崇むべき御身の御足のふみ台となって
ここに恥じ赤らむしかないわが額がある

ここに働くことのなかつたわが手がある
燃え上る炭となり 珍しい香となつて
ここに働くことのなかつたわが手がある

ここにただ空しく打つしかなかったわが心臓がある
カルヴァリヤの丘の茨に脈うって流れるために
ここにただ空しく打つしかなかったわが心臓がある

ここに移り気な旅人わが足がある
御身の恩籠の呼びかけに走りよるために
ここに移り気な旅人 わが足がある

ここに隠蔽で偽りの騒音 わが声がある

「贖罪」のとがめの言葉をくり返すために
ここに隠蔽で偽りの騒音 わが声がある

ここに 誤まちの燈明 わが眼がある
祈りの涙に消されるように
ここに 誤まちの燈明 わが眼がある

ああ 御身 施しと許しの神よ
わが忘恩の井戸とはいかなるものか
ああ 御身 施しと許しの神よ



ロンドンのヴェルレーヌ

恐怖の神よ 神聖なる神よ

ああ わが罪のこの暗い深淵

恐怖の神よ 神聖なる神よ

御身 平和の 歡喜の 幸福の神よ

わが恐れの手すべて わが無知の手すべて

御身 平和の 歡喜の 幸福の神よ

御身はこれらすべてを知り給う すべてを

私が誰よりも貧しいことも

御身はこれらすべてを知り給う すべてを

しかし 主よ 私の持てるすべてを 私はあなたに

捧げるのだ

すでに紹介したIVが主と詩人との対話を壮大にかつ精密に描出しているのに対し、このIではヴェルレーヌの信仰心が裸形といつていい素朴さでつよく打ち出されている。それだけに余計な註釈を施さずただ鑑賞すればそれでよいのだから、もともとヴェルレーヌの信仰は感情的な要素がつよく、それだけ堅牢に構

築されたものではない。それゆえ、鈴木信太郎のように、第二部をもっとも美しい詩篇を含むと認めながらも、次のように論断する向きも少くはない。

（ヴェルレーヌの信仰は、極めて単純で、極めて敬虔で、極めて温和で、教理を究める努力もなく、教義を象徴に訴える華麗さもなく、形式の美しさもない。然しながら、ここに歌われた赤心の裸形の真面目さ、その飛躍、只管に神を信ずる者の謙遜な無我の意向の上に透写された言葉、そこに魅力も価値も存する。詩人の心は善と悪との間に振動し闘争する冥想だけである。従って、美しいけれども単調である。純粹ではあるが退屈である。……）（岩波文庫解説一八五頁）

私はむしろ計量された詩集であると考え。しかし、鈴木氏のこの直感も『叡智』の本質を明らかに写していることは間違いない。要するにこの詩集の単純明快な美しさは計量されたものか否かを問わず直截的にわれわれの心底に響くものということができよう。

そこで第三部の詩篇であるが、この多くは第二部以前に書かれたものであるにもかかわらず、あえて採用されたのはヴェルレーヌにとって捨てがたい趣があったからに違いない。今キュエノの提起に従ってその中でも美しい二、三篇を訳出してみよう。そこにはすでにヴェルレーヌの詩の本質的な魅力をなして来た（魂の状態と相通う風景の魅惑）が十分に盛られており、モリスの pittoresque という評価をはつきりと裏付けている詩が多く見出される。先ずⅢのⅢである。（Ⅱは長詩なのでここでは割愛する）。

希望は輝いている 厩うまやの中の一片の藁のように

狂ったように飛びながら酔いしれるあの蜂の何が恐

いのか

見給え どこかの穴からさす陽の光はたえず埃をき

らめかせる。

テーブルに肘をつきながら なぜお前は眠らなかつ

たのか

蒼ざめた哀れな魂よ せめて凍ったこの井戸の水を

飲みほせよ

飲んで その後は眠るのだ そら見ろ 私は残り

そしてお前の昼寝の夢をあやしてやろう

するとお前はゆりかごにゆられる子のように小さく

歌うのだ

正午の鐘が鳴っている。奥さんお願いだからあちら

へ行って

かれは眠っている。不幸の人々の頭の中で

女の足音がどんなに響くかはふしぎなほどだ



ルベルチエ

正午の鐘が鳴っている。部屋には灌水をさせておいた

さあ眠り給え 希望は輝いているくぼみの中の小石のように

ああ 九月のバラがまた咲くのはいつのことか

この詩は情景に明確なつながりがない。しかし、友人ルベルチェの証言によればランボオの詩法を意識した象徴的な詩なのだという。するとランボオ、マチルドをめぐるかれの未練と逡巡とが浮き上つて来る。へ九



ルベルチェ・グランダンとともに

月のバラも獄外への希望の流し目か。

大きな黒い眠りが

私の生命いのちに襲いかかる

眠るのだ 希望という希望よ

眠るのだ 羨望という羨望よ

もう何も見えず

思い出すものとしてない

善の記憶も 悪の記憶も……

ああ いやな話だ!

私は穴倉のくぼみで

一つの手にゆすられる

一つのゆりかごだ

静かに 静かに!

これはⅢのVで、七三年八月八日に書いたと記録されている。それは言うまでもなくあの禁錮刑二年を言わされた日だ。この日のかれの状態については前回に述べたとうりだ。そしてⅢのⅥも忘れられない(「空は屋根の向こうにのぞいている／あんなにも青く、あ

んなにも静かに……。これらはみんな美しい詩篇としてわれわれはやっぱりと気づく。このトーンは『土星びとの歌』からの、ヴェルレーヌのすぐれた詩のすべての底深く響きわたっていたものなのだ。処女作の中にその作家のすべてがあるということはいっだって変わることはない真実なのだろうか。

(やまむら よしみ・文学部仏文科教員)

お詫びと訂正

書評82号(前号)の山村論文中、編集子の手違いのため多くの誤りがありました。お詫びとともに次のように訂正します。

- 54頁見出し部分 独房入り 世界……独房入りの世界
- 56頁上段2行目 アチルド……マチルド
- 57頁上段6行目 どうか感傷には……どうか感傷的には
下段7行目 ありののに……ありのままに
- 59頁下段14行目 浄留して……豆留して
16行目 定の辺ない……内側に寄る辺ない
- 60頁下段5行目 (同上) などその……(同上) など、
- 61頁上段5行目 はつか鼠がちよろちよろ走る
……1字下げにする

14行目 ざらりと……ざらりと

62頁上段3行目 何した……付した

5行目 聞くかよい……聞くがよい

62頁上段8行目 この陰気は……この陰気な

63頁上段1行目 といった時間……去っていった時間

5行目 アチルド……マチルド

11、12行目 Viéux 《Copess》

…… Viéux 《Copées》

13行目 《Réversibilités》……《Réversibilités》

17行目 なっているし、疲れた、

……なっているし、「疲れた、

20行目 頂点に、達し……頂点に達し

21行目 していたがさらに……

していたが、さらに

下段1行目 アチルド……マチルド

2行目 打真を……打撃を

9行目 Ⅲの4)……Ⅱの4)

11行目 は生ず……は先ず

64頁上段1行目 汝には見える……汝には見えよう

2行目 わが心臓と……わが心臓と

4行目 わが腕と そして……さらに十字架も

……1行右に移動

5 行目 海錦も……海綿も
65 頁下段 5 行目 それにあんまり……それにあんまり
66 頁下段 18 行目 後の二駝を……後の二駝を

お知らせ

◎投稿募集

最近読んだ本の書評、内容紹介、批判等の作業を通じて、自己の主張を述べたもの、現状分析、研究成果の発表、論文も結構です。

詳細については、生協本部 3F 「書評」編集委員会までお問い合わせ下さい。

◎投稿規定は以下の通りです。

▼原稿は原則として縦書きで、一行二五字、二三行（五五〇字）を一枚と計算します。

▼枚数は自由。（ただし編集上の都合で何回かに分けて掲載することもあります。）

▼締め切り各月末日。

▼原稿には住所、氏名、学籍番号、電話番号を必ず記入して下さい。

▼原稿は返却しません。必要な場合はコピーをとって置いて下さい。

▼送り先

〒565 吹田市千里山東三―一〇―一

関西大学生協同組合「書評」編集委員会

Ⅲ（〇六）三八八一―一一二一 内線四八二一

『新入生歓迎セミナー』のお知らせ

1988年何を学ぶのか?

新歓セミナー参加者を募集します。

さあ! 大学に入るにあたり、君は何を学んでゆくのか?
固苦しい「セミナー」のイメージを壊してしまうこのセミナーで
講師の先生方と酒をくみかわし、身近なところで起きる問題を
テーマにそって考え、新しい出会いを求めよう。
4年間を後悔しないために!

テーマ How to enjoy Campus Life

日程・3月26日(土)・27日(日)

場所・奈良

講師・芝井敬司(文)・渡辺幸博(文)・石尾芳久(法)

テーマ マスコミを語る

日程・4月9日(土)・10日(日)

場所・神戸

講師・足立利雄(社)・松岡 保(経)・市原靖久(法)・三谷 真(商)

テーマ 教育を語る 教育を語る

日程・4月23日(土)・24日(日)

場所・京都 伏見

講師・岡村達雄(文)・野口太郎(工)・山村嘉己(文)

(順不同)

しめきり ■先着30人(各回)

参加費用 ■2,500円(交通費、宿泊費、食費、資料代等含む)

申し込み・お問い合わせは ■生協本部3階 組織部まで

☎06-387-9998(直通)

06-388-1121(内線4821)

お詫びと訂正

「書評」82号に次の通り誤りがありましたので
お手数ですが訂正してください。

●「目次・四頁見出し部分」

投稿・いまなゼフーコか(下)

↓ 寄稿・いまなゼフーコか(下)

●三頁下段15行目

真検 ↓ 真剣

●六七頁・投稿募集の欄

☎ 384・9874

↓ 387・9998

編集後記

4月号は新入生歓迎特集号です。これからのようにして本を読もうか、また、どう読んでいくのかを各学部
の先生方に御執筆願いました。本を読むにも様々な読み
方があります。一人の作家を深く掘り進む、また、テー
マに基づいて読んでいくなど、目的に応じてあります。本
を読む行為を目的化することなしに、私たちの視点で
文化・思想・社会をとらえ、与えられてきた考え方、物
を見る視点を解き放ちましょう。既存の文化にとどまら
ず、私たちの文化生活を形成しませんか。

書評は活字をメディアとして、私たちの文化形成を行
うべく、発行を続けています。これまで、編集の力量、
発行の遅れと問題がありますが、克服すべく、現在、編
集体制強化を行っており、書評の楽しみの一つ、特集を
組み、講演録・対談・本の案内なども行い、知的好奇心
を掘り起していこうと考えています。事を成そうとする
喜びと恐れに震えております。書評の存在する大前提、
読者と編集者の関係を考えて、今、読者の皆様の声を必
要とする意味がお分りいただけると存じます。

投稿とともに批判の声をお寄せ下さい。

★お詫び

池田浩士先生連載の「小説のなかの異境」は先生の御
病気のため、今月号は休載いたします。

季刊「書評」 1988年4月号 通巻83号

編集・発行 関西大学生協同組合・組織部「書評」編集委員会

連絡先 吹田市千里山東3-10-1 (☎388-1121 (内線 4821) or 387-9998)

頒 価 250 円